

日蓮大聖人御書全集

しようほつけだいもくしょう

唱法華題目抄

しょうほつけだいもくしょう
唱法華題目抄

ぶんおうがんねん

文応元年（'60）

5月28日

39歳

がつ

にち

ほけきょう

ある人、予に問うて云わく、世間の道俗、させる法華経の

もんぎ

わきま

いちぶ

いつかん

しようぼん

じがげ

いっくとう

文義を弁えずとも、一部・一巻・四要品・自我偈・一句等を

じゅじ

みづか

読

書

ひと

受持し、あるいは自らもよみかき、もしは人をしてもよみ

きょう

む

たてまつ

かかせ、あるいは我とよみかかざれども経に向かい 奉り

がっしょう

らいはい

こうげ

くよう

かみ

ぎょう

合掌・礼拝をなし香華を供養し、あるいは上のごとく行ず

ひと

た

ぎょう

み

ずいき

こころ

ぎょう

ることなき人も、他の行ずるを見てわざかに隨喜の心を

こくちゅう

きょう

ひろ

よろこ

てい

おこし國中にこの經の弘まれることを悦ばん。これ体の

わづかのことによりて、世間の罪にも引かれず、彼の功德に
ひ
引かれて、小乗の初果の聖人の度々人天に生まれてしか
あくどう
お
も悪道に墮ちざるがごとく、常に人天の生をうけ、終に
ほけきよう
こころう
法華経を心得るものと成つて、十方淨土にも往生し、ま
たこの土においても即身成仏することあるべきや。委細に
そくしんじょうぶつ
じっぽうじょうど
おうじょう
いさい
これを見かん。

答えて云わく、させる文義を弁えたる身にはあらざれど
ほけきよう
ねはんぎよう
み
も、法華経・涅槃経ならびに天台・妙楽の釈の心をもつ
て推し量るに、かりそめにも法華経を信じていささかも謗
ほけきよう
しん
ぼう

を生ぜざらん人は、余の悪にひかれて悪道に墮つべしとは
おぼえず。ただし、悪知識と申して、わざかに權教を知れ
る人智者の由をして法華經を我らが機に叶い難き由を和ら
げ申さんを、誠と思つて、法華經を隨喜せし心を打ち捨て
余教へうつりはてて、一生さて法華經へ帰り入らざらん人
は、惡道に墮つべきこともありなん。

仰せについて疑わしきこと侍り。實にてや侍るらん、
「法華經に説かれて候」とて智者の語らせ給いしは、「昔、
三千塵点劫の当初、大通智勝仏と申す仏います。その仏の

凡夫にていましける時、十六人の王子おわします。彼の父
の王、仏にならせ給いて一代聖教を説き給いき。十六人
の王子もまた出家して、その仏の御弟子とならせ給いけり。
大通智勝仏、法華経を説き畢わらせ給いて定に入らせ給い
しかば、十六人の王子の沙弥、その前にして、かわるが
わる法華経を講じ給いけり。その所説を聴聞せし人、幾
千万ということをしらず。当座に悟りをえし人は不退の位
に入りにき。また法華経をおろかに心得る結縁の衆もあり。
その人々、当座・中間に不退の位に入らずして三千塵点劫

経

あいだ

ろくどうししよう

りんね

こんにち

をへたり。その間、またつぶさに六道四生に輪回し、今日、
釈迦如来の法華経を説き給うに、不退の位に入る。いわゆ
る舍利弗・目連・迦葉・阿難等これなり。なおお信心薄き
もの

者は、当時も覚らずして未來無数劫を経べきか。知らず、我
らも大通智勝仏の十六人の結縁の衆にもあるらん。

この結縁の衆をば、天台・妙楽は名字・觀行の位にかな

叶

いたる人なりと定め給えり。名字・觀行の位は、一念三千

ひと

けちえん

さと

さと

みらいむしゅこう

ふ

しんじんうす

われ

しゆ

けちえん

しゆ

けちえん

しゆ

けちえん

くらい

いちねんさんぜん

てんだい

叶

の義理を弁え、十法成乗の觀を凝らし、能く能く義理を

わきま

ひと

けちえん

さと

みらいむしゅこう

ふ

しんじんうす

われ

しゆ

けちえん

しゆ

けちえん

しゆ

けちえん

くらい

いちねんさんぜん

てんだい

叶

弁えたる人なり。『一念隨喜』『五十展轉』と申すも、天台・
一念隨喜

わきま

ひと

いちねんずいき

ごじってんでん

もう

てんだい

叶

妙樂の釈のごときは、皆、觀行五品の初隨喜の位と定め
給えり。博地の凡夫のことにはあらず。

しかるに、我らは末代の一字一句等の結縁の衆、一分の
義理をも知らざらんは、あに無量の世界の塵点劫を経ざら
んや。これひとえに、理深解微の故に、教は至つて深く機

は実に浅きがいたすところなり。ただ弥陀の名号のみを唱
えて順次生に西方極樂世界に往生し、永く不退の無生忍
を得て、阿弥陀如来・觀音・勢至等の法華經を説き給わん時、

聞いて悟りを得んにはしかじ。しかるに、弥陀の本願は、

有智・無智、善人・悪人、持戒・破戒等をも択ばず、ただ一念
唱うれば、臨終に必ず弥陀如来、本願の故に来迎し給う。

これをもつて思うに、この土にして法華経の結縁を捨て
て淨土に往生せんとおもうは、億千世界の塵点を経ずして
疾く法華経を悟らんがためなり。法華経の根機にあたわざ
る人の、この穢土にて法華経にいとまをいれて一向に念佛
を申さざるは、法華経の証は取り難く、極樂の業は定まら
ず、中間になりて、中々法華経をおろそかにする人にてや
おわしますらん」と申し侍るはいかに。

うえ ただいまうけたまわ そうら
その上、只今 承り候えば、わざかに法華経の結縁ば

さんあくどう お

そうちら

ろくどう

かりならば、三悪道に墮ちざるばかりにてこそ候え、六道

しょうじ い

ねんぶつ ほうもん

ぎり し

の生死を出ずるにはあらず。念佛の法門は、なにと義理を知

みだ

みょうじゅう

とな たてまつ

じょうど

おうじょう

よし

らざれども弥陀の名号を唱え奉れば淨土に往生する由

もう はる

ほけきょう

みだ

みょうじゅう

おうじょう

よし

を申すは、遙かに法華経よりも弥陀の名号はいみじくこそ

き

聞こえ侍れ。

こた

い

まこと

おお

うえ

ちしゃ

おんものがたり

答えて云わく、誠に仰せめでたき上、智者の御物語に

はべ

ぞん

そうちら

うえ

おんものがたり

て侍るなれば、さこそと存じ候えども、ただし、もし

おんものがたり

はべ

御物語のごとく侍らば、すこし不審なること侍り。

ふしん

はべ

だいつけちえん もの 粗々 打充 もう みょうじ
大通結縁の者をあらあらうちあてがい申すには名字・
かんぎょう もの はべ まさ みょうじそく くらい
觀行の者は釈せられて侍れども、正しくは名字即の位
もの さだ はべ うえ たいだいしゅしよう もの ほけきょう 捨
の者と定められ侍る上、退大取小の者とて、法華経をすて
て 権教にうつり後には惡道に墮ちたりと見えたる上、正し
ほけきょう 移のち あくどう お うえ まさ
く法華経を誹謗してこれを捨てし者なり。たとい義理を知
るもの ひと ほうぼう ひと もの み ぎり し
るようなる者なりとも、謗法の人があらん上は、三千塵点・
むりょうじんてん はべ うえ さんぜんじんてん
無量塵点も経べく侍るか。「五十展転」「一念隨喜」の人々を
かんぎょうしょざい くらい もの しゃく
觀行初隨喜の位の者と釈せられたるは、末代の我らが
ずいきとう か ずいき なか い おお そそうう
隨喜等は彼の隨喜の中には入るべからずと仰せ候か。こ

れを「天台・妙楽、初隨喜の位と釈せられたり」と申さるるほどにては、また名字即と釈せられて侍る釈はするべきか。

せん

おお

おんぎ

くわ

あん

恐

詮ずるところ、仰せの御義を委しく案すれば、おそれに

そうちら

ほうぼう

いちぶん

ゆえ

ては候えども、謗法の一分にやあらんずらん。その故は、

ほけきよう

われ

まつだい

き

かな

がた

よし

おお

そうろう

まつだい

まつだい

法華經を我ら末代の機に叶い難き由を仰せ 候は、末代の

いつさいしゅじょう

えど

ほけきよう

ぎょう

せんな

一切衆生は穢土にして法華經を行じて詮無きことなりと

おお

な

おんことば

き

すで

ほけきよう

しん

いつさいしゅじょう

ものう

仰せらるるにや。もし、さように侍らば、末代の一切衆生
の中に、この御詞を聞いて、既に法華經を信する者も打ち

捨てて、いまだ行ぜざる者も行ぜんと思うべからず。隨喜

す もの ぎょう おも

こころ とど はべ ほうぼう もの いつきいしゅじょう ほうぼう ぶん

の心も留め侍らば、謗法の分にやあるべかるらん。もし

ねんぶつ もう たも

謗法の者に一切衆生なるならば、いかに念佛を申させ給う

ごおうじょう ふじょう はべ

とも、御往生は不定にこそ侍らんずらめ。

みだ みょうこう とな ごくらくせかい おうじょう 遂

また、弥陀の名号を唱え極楽世界に往生をとぐべき

由 おお はべ

きょうろん しょうこ

よしを仰せられ侍るは、いかなる経論を証拠としてこの

こころ 付 たま

まさ 強 しょうもんそうちう

心はつき給いけるやらん。正しくつよき証文候か。も

無 ぎ 賴

しなくば、その義たのもしからず。

さき もう そうちら

ほけきよう しん はべ

前に申し候いつるがごとく、法華經を信じ侍るは、させ

る解なけれども三悪道には堕つべからず 候。六道を出ず

ることは、一分のさとりなからん人は有り難く侍るか。た

だし、悪知識に値つて法華経隨喜の心を云いやぶられて

そら

候 わんは、力及ばざるか。

おお

おどろ

おぼ はべ

ゆえ

ほけきよう

また、仰せについて驚き覚え侍り。その故は、法華経は
末代の凡夫の機に叶い難き由を智者申されしかば、さかと
思ひ侍るところに、只今の仰せのごとくならば、弥陀の

まつだい ぼんふ き かな がた よし ちしゃもう

ただいま おお

おお

みだ

名号を唱うとも、法華経をいいうとむるとがによりて、

みょうこう とな

ほけきよう

言

疎

失

往生をも遂げざる上惡道に墮つべきよし 承 るは、ゆゆ

おうじよう

と

うえあくどう

お

由

うけたまわ

だいじ

はべ

しき大事にこそ侍れ。

だいつうけちえん

もの

ほうぼう

ゆえ

ろくどう

めぐ

そもそも、「大通結縁の者は、謗法の故に六道に回るも、

みょうじそく

せんい

もの

いちねんずいき

ごじつてんでん

また名字即の浅位の者なり。また『一念隨喜』『五十展転』

もの

みょうじ

かんぎようそく

くらい

もう

しゃく

ところ

の者もまた名字・觀行即の位」と申す釈は、いずれの処

そういう

くわ

うけたまわ

そういう

に候 やらん。委しく 承り候 わばや。また、義理をも知

もの

ほけきよう

しん

はべ

あくちしき

おし

らざる者の、わずかに法華經を信じ侍るが、悪知識の教え

ほけきよう

す

ごんきよう

うつ

ほか

せけん

あくごう

によつて法華經を捨てて 権教に移るより外の世間の悪業

ひ

あくどう

お

よしもう

しょうこ

に引かれては、惡道に墮つべからざる由申さるるは、証拠あ

るか。また、無智の者の念佛申して往生するといずれに見

むち

もの

ねんぶつもう

おうじよう

み

もう たも

世 こと 新

はべ

えてあるやらんと申し給うこそ、よに事あたらしく侍れ。

そうかんぎょうとう じょうど さんぶきょう ゼんどうおしようとう きょうしゃく あき

双觀經等の淨土の三部經、善導和尚等の經釈に明らかに

み はべ うえ うたが たも

見えて侍らん上は、なにとか疑い給うべき。

こた い だいつけちえん もの たいだいしゅしよう ほうぼう みょうじそく

答えて曰わく、大通結縁の者を、退大取小の謗法、名字即

もの もう わたくし ぎ てんだいだいし もんぐ だいさん

の者と申すは、私の義にあらず。天台大師、文句の第三の

まき い ほう き せ ぜ あい あ

卷に云わく「法を聞いていまだ度せずして世々に相值つて

いま しょうもんじ じゅう ものあ すなわ か とき けちえん しゅ

今に声聞地に住する者有り。即ち彼の時の結縁の衆なり」

しゃく たま はべ みょうらくだいし しょき だいさん かさ

と釈し給いて侍るを、妙楽大師、疏記の第三に重ねてこの

しゃく こころ の たま い ほん い

釈の心を述べ給いて云わく「ただ、いまだ品に入らざる

を、ともに結縁と名づくるが故に」文。文の心は、大通結縁の者は名字即の者となり。また、天台大師、玄義の第六に大通結縁の者を釈して云わく「もしほは信、もしほは謗。因つて倒れ、因つて起く。喜根をば謗ずといえども、後に要らず度を得るがごとし」文。文の心は、大通結縁の者の三千塵点を経るは謗法の者なり、例せば、勝意比丘が喜根菩薩を謗ぜしがごとしと釈す。「五十展転」の人は五品の初めの初隨喜の位」と申す釈もあり。また「初隨喜の位の先の名字即」と申す釈もあり。疏記の第十に云わく「初めに

ほうえ

き

まさ

しょほん

だいごじゅうにん

かなら

法会にして聞く。容にこれ初品なるべし。第五十人は必ず
隨喜の位の初めに在る人なり」文。文の心は、初会聞法の
人は必ず初隨喜の位の内、第五十人は初隨喜の位の先の
名字即と申す釈なり。

その上、「五種法師にも、受持・読・誦・書写の四人は自行
の人、大経の九人の先の四人は解無き者なり。解説は化他、
後の五人は解有る人」と証し給えり。疏記の第十に五種
法師を釈するには、「あるいは全くいまだ品に入らず」、

また云わく「一向いまだ凡位に入らず」文。文の心は、五種

ほつし かんぎょうごほん しゃく
法師は觀行五品と釈すれども、また五品以前の名字即の
くらい しゃく
位とも釈するなり。これらの釈のごとくんば、義理を知
みょうじそく ぼんぶ ずいきてう くどく きょうもん いちげいつく
らざる名字即の凡夫が隨喜等の功德も、経文の「一偈一句、
いちねんずいき もの ごじってんでん とう うち い おぼ そうろう
一念隨喜の者」「五十展転」等の内に入るかと覚え候。
しゃく
いかにいわんや、この経を信ぜざる謗法の者の罪業は
ひゆほん くわ 説
きょう しん
譬喻品に委しくとかれたり。持経者を謗する罪は法師品に
じきようしゃ ぼう つみ ほっしほん
とかれたり。この経を信ずる者の功德は分別功德品に
すいきくどくほん と ほうぼう もう いはい ぎ
隨喜功德品に説けり。謗法と申すは違背の義なり。隨喜と申
すは隨順の義なり。させる義理を知らざれども一念も貴き
すいじゅん ぎ
いちねん たつと

よしもう

いはい

すいじゅん

なか

と

そうろう

由申すは、違背・隨順の中にはいずれにか取られ候べき。

まつだい むち もの

くよう すいき くどく きょうもん

また末代無智の者のわざかの供養・隨喜の功德は經文には

載せられざるか、いかん。

うえ てんだい みょうらく しゃく こころ た にんし

ほけきょう

その上、天台・妙樂の釈の心は、他の人師ありて法華經

ないし どうじ たわむ

いちげいっく

ごじってんでん

もの

の「乃至、童子の戯れに」「一偈一句」「五十展転」の者を

じょうしよう ぎょうぎ しゃく

爾前の諸經のごとく上聖の行儀と釈せられたるをば、

ほうぼう もの さだ たま

謗法の者と定め給えり。しかるに、我が釈を作る時、機を

たか と まつだいぞうあく ほんぶ まよ たま

じごそいい

高く取つて末代造惡の凡夫を迷わし給わんは、自語相違に

ゆえ みょうらくだいし ごじつてんでん ひと しゃく い

あらずや。故に、妙樂大師、「五十展転」の人を釈して云わ

く「恐らくは、人謬つて解せる者、初心の功德の大なることを測らずして、功を上位に推り、この初心を蔑る。故に、今、彼の行浅く功深きことを示して、もつて経力を顯す文。文の心は、謬つて法華経を説かん人の、この経は利智精進・上根上智の人ためといわんことを、仏おそれて、下根下智・末代の無智の者のわざかに浅き隨喜の功德を四十余年の諸経の大人・上聖の功德に勝れたりと顕さんとして、「五十展転」の隨喜は説かれたり。故に、天台の釈には、外道・小乗・權大乗までたくらべ來つて、

ほけきょう さいげ くどく すぐ よし しゃく

法華經の最下の功德が勝れたる由を釈せり。

ゆえに、阿竭多仙人は十二年が間恒河の水を耳に留め、耆菟仙人は一日の中に大海の水をすいほす。かくのごとき

とくつう

せんにん

しううじよう

あごんきよう

さんげん

せんい

いっつう

ぎ ぬせんにん

いちにち

うち

たいかい

みず

吸

干

みず

みみ

あかたせんにん

じゅうにねん

あいだごうが

みず

みみ

とど

得通の仙人は、小乗の阿含經の三賢の浅位の一通もなき

ぼんぶ

ひやくせんまんばいおと

さんみようろくつう

しううじよう

しょだいじようきよう

凡夫には、百千万倍劣れり。三明六通を得たりし小乗の

しゃりほつ

もくれんとう

けごん

ほうどう

はんにやとう

しょだいじようきよう

舍利弗・目連等は、華嚴・方等・般若等の諸大乗經の

みだんせんわく

いつつう

いちげいっく

ぼんぶ

ひやくせんまんばい

未断三惑の一通もなき「一偈一句」の凡夫には、百千万倍

おと

けごん

ほうどう

はんにやきよう

なら

きわ

とうがく

だいぼさつ

劣れり。華嚴・方等・般若經を習い極めたる等覺の大菩薩

ほけきょう

けちえん

みだんせんわく

むあくふぞう

は、法華經をわずかに結縁をなせる未断三惑・無惡不造の

末代の凡夫には百千万倍劣れる由、釈の文顯然なり。

しかるを、当世の念佛宗等の人、我が身の權教の機にて実經を信ぜざる者は、方等・般若の時の二乗のごとく自身をはじしめてあるべきところに、あえてその義なし。

あまつさえ、世間の道俗の中に、わずかに觀音品・自我偈などを読み、たまたま父母孝養などのために一日經等を書くことあれば、いいさまたげて云わく「善導和尚は、念佛に法華經をまじうるを雜行と申し、百の時は希に一・二を得、千の時は希に三・五を得ん、乃至、千中無一と仰せら

れたり。いかにいわんや、智慧第一の法然上人は、法華経
とう ぎょう もの そふ くつ ぐんぞくとう ちえだいいち ほうねんしょうにん ほけきょう
等を行ずる者をば、祖父の履あるいは群賊等にたとえられ
たり」なんどいいうとめ侍るは、かくのごとく申す師も弟子
あび ほのお まね はべ もう し でし もの まね まう うへ うへ うへ
も阿鼻の焰をや招かんずらんと申す。

問うて云わく、いかなるすがた、ならびに語をもつてか、
ほけきょう せけん 言 疎 姿 ことば
法華經を世間にいいうとむる者には侍るや。よにおそろし
くこそおぼえ候え。

答えて云わく、始めに「智者の申され候」と御物語り候
こた い はじ ちしゃ もう そもう おんものがた そうちら あくちしき ことば はべ
いつること、法華經をいいうとむる悪知識の語にて侍れ。

末代に法華經を失うべき者は、心には一代聖教を知り

もの

ここる

いちだいしようぎょう

し

たりと思つて、しかも心には權實二經を弁えず、身には

さんねいっぽつ

たい

あれんにや

み

三衣一鉢を帶し、あるいは阿練若に身をかくし、あるいは

せけん

ひと

ちしゃ

おも

み

世間の人にいみじき智者と思われて、しかも法華經をよく

し よし ひと し

せけん

どうぞく

よく知る由を人に知られなんとして、世間の道俗には

さんみょうろくつう

あらかん

たつと

ほけきょう

うしな

三明六通の阿羅漢のごとく貴ばれて法華經を失うべし
と見えて候。

と い しょうこ

問うて云わく、その証拠いかん。

こた

い

ほけきょうかんじほん

い

もうもう

むち

ひと

答えて云わく、法華經勸持品に云わく「諸の無智の人の、

あつく めりとう とうじょう くわ ものあ われ みな
悪口・罵詈等し、および刀杖を加うる者有らん。我らは皆
まさに しの まさに みようらくだいし もん みようらくだいし
當に忍ぶべし」文。妙樂大師、この文の心を釈して云わ
く「初めに一行は通じて邪人を明かす。即ち俗衆なり」文。
もん こころ あ すなわ ぞくしゅ もん
文の心は、この一行は在家の俗男・俗女が權教の比丘等
語 かたき
にかたらわれて敵をすべしとなり。

きょう い あくせ なか びく じやち
経に云わく「惡世の中の比丘は、邪智にして心詭曲に、
おも え
いまだ得ざるを謂つて得たりとなし、我慢の心は充満せ
もん みようらくだいし もん こころ しゃく
ん」文。妙樂大師、この文の心を釈して云わく「次に一行
もの あ もん こころ
は道門増上慢の者を明かす」文。文の心は、惡世末法の

「ごんきょう もろもろ びく われほう え
まん ほけきょう ぎょう
かたき」
権教の諸の比丘、我法を得たりと慢じて、法華經を行ず
るもの敵となるべしといふことなり。

に、外道の論議を説く。自らこの經典を作つて、世間の人
を誑惑す。名聞を求めるがための故に、分別してこの經を
説く』と。常に大衆の中に在つて我らを毀らんと欲するが故
に、国王・大臣・婆羅門・居士および余の比丘衆に向かつ
て、誹謗して我が惡を説いて『これ邪見の人、外道の論議を
説く』と謂わん』已上。

妙樂大師、この文を釈して云わく「三に七行は
僭聖増上慢の者を明かす」文。經ならびに釈の心は、
悪世の中に多くの比丘有つて、身には三衣一鉢を帶し、

あれんにゃ こ

ぎょうぎ だいかしようとう さんみようろくつう らかん

阿練若に居して、行儀は大迦葉等の三明六通の羅漢のごと

ざいけ しょにん

いちごん は

によらい きんげん

く、在家の諸人にあおがれて、一言を吐けば如來の金言の

思

ほけきょう ぎょう

ひと 言

破

ごとくおもわれて、法華經を行ずる人をいいやぶらんがた

こくおう だいじんとう

む たてまつ

ひと じやけん もの

めに、国王・大臣等に向かい 奉つて「この人は邪見の者な

ほうもん

じやほう

言 疎

り。法門は邪法なり」なんどいいうとむるなり。

かみ さんいん なか

だいいち ぞくしゅ そし

忍 難

だいに じやち

びく

上の三人の中に、第一の俗衆の毀りよりも第二の邪智の

比丘の毀りはなおしおのびがたし。また第二の比丘よりも
第三の大衣の阿練若の僧は甚だし。

だいさん だいえ あれんにゃ そう はなは

さんいん とうせい

ごんきょう てほん

もんじ

ほつし

この三人は、当世の權教を手本とする文字の法師、なら

びに諸經論の「言語の道断ゆ」の文を信ずる暗禪の法師、
ならびに彼らを信ずる在俗等、四十余年の諸經と法華経との權実の文義を弁えざる故に、華嚴・方等・般若等の「心と仏と衆生」「即心是仏」「即ち十方・西方に往く」等の文と、法華経の「諸法實相」「即ち十方・西方に往く」の文と、語の同じきをもつて義理のかわれるを知らず。
あるいは諸經の「言語の道断え、心行の所滅す」の文を見て、一代聖教には如來の実事をば宣べられざりけりなんどの邪念をおこす。故に、悪鬼、この三人に入つて末代

の諸人を損じ、國土をも破るなり。

しょにん

そん

こくど

じょつこうあくせ

なか

おお

もうもう

ゆえ

きょうもん

い

われ
めり

きにく

われ

めり

きにく

恐怖有らん。

惡鬼はその身に入つて、我を罵詈・毀辱せん

ないしほとけ

ほうべん

よろ

したが

と

乃至仏の方便、

宜しきに随つて説きたもうところの法を

し

もん
もん

こころ

じょくあくせ

とき

びく

わ

しん

知らず」文。

文の心は、濁悪世の時、比丘、我が信ずると

おし

ほとけ

ほうべんずいぎ

ほうもん

知

ころの教えは仏の方便隨宜の法門ともしらずして、

權実を

わきま

ひとしゅつたい

の

は

弁えたる人出来すれば罵り破しなんどすべし、

これひとつ

あつき

み
い

い

い

は

まつだい

えに悪鬼の身に入りたるをしらずと云うなり。されば、末代

ぐにん

おそ

とうじょう

こころう

じゅうあくごぎやくとう

の愚人の恐るべきことは、刀杖・虎狼・十惡五逆等より

よそ

とうじょう

こころう

じゅうあくごぎやくとう

も、三衣一鉢を帶せる暗禪の比丘と、ならびに權經の比丘
を貴しと見て実經の人をにくまん俗侶等なり。

故に、涅槃經二十二に云わく「惡象等においては心に

恐怖なく、惡知識においては怖畏の心を生ず。何をもつての故に。この惡象等はただ能く身を壊るのみにして、心

を壞ること能わず。惡知識は二つともに壞るが故に。乃至惡象に殺されでは三趣に至らず、惡友に殺されでは必ず三趣に至る」文。この文の心を章安大師宣べて云わく「諸の

惡象等は、ただこれ惡縁なるのみにして、人の惡心を生ず

あくちしき かんだん さび こうげん れいしょく ひと
あく な あく な あく な あく な あく な あく な
やぶ ひと こころ あくちしき もう すなわ ジゴーく お もん もん
ひ あま 語 いづわ こ ことば
たく ひと こころ と ゼンシン やぶ
さく あくちしき もう すなわ ジゴーく お もん もん
の心は、悪知識と申すは、甘くかたらい、詐り媚び、言を
の心は、悪知識と申すは、甘くかたらい、詐り媚び、言を
破る。これを名づけて殺となす。即ち地獄に墮つ」文。文
破る。これを名づけて殺となす。即ち地獄に墮つ」文。文
牽いて悪を作さしむ。悪を作すをもつての故に人の善心を
牽いて悪を作さしむ。悪を作すをもつての故に人の善心を
なり。

そう ねはんぎょう じゅうあくごぎやく もの
總じて、涅槃經の心は、十惡五逆の者よりも謗法・闡提
ほけきょう ねはんぎょう い いまし せんだい ひと もう とうせい ねんぶつしゃ ほうぼう せんだい
のものをおそるべしと諒めたり。闡提の人と申すは、
法華經・涅槃經を云いとむる者と見えたり。當世の念佛者
疎 もの み

とう　ほけきよう　し　きわ　よし
等、法華經を知り極めたる由をいうに、因縁・譬喻をもつて釈し、よくよく知る由を人にしられて、しかして後には、この經のいみじき故に末代の機のおろかなる者及ばざる由をのべ、強き弓・重き鎧、かいなき人の用にたたざる由を申せば、無智の道俗さもと思つて、実には叶うまじき権教に心を移して、わずかに法華經に結縁しぬるをも翻し、また人の法華經を行づるをも隨喜せざる故に、師弟ともに謗法の者となる。

これによつて、謗法の衆生、國中に充滿して、たまた

まつじ

當

ほけきょう

くよう

ついぜん

しゆ

ねんぶつ

ま仏事をいとなみ法華経を供養し追善を修するにも、念佛
とう ぎょう ほうぼう じやし そうきた ほけきょう まつだい き かな

等を行ずる謗法の邪師の僧來つて、法華経は末代の機に叶
がた よし しめ ゆえ せしゅ せつ まこと しん

い難き由を示す。故に、施主もその説を実と信じてあるあ
とぶら かこ ふぼ ふうふ きょうだいとう

いだ、訪わるる過去の父母・夫婦・兄弟等はいよいよ地獄
く ま こうし ふこう ほうぼう もの じごく

の苦を増し、孝子は不孝・謗法の者となり、聴聞の諸人は
じやほう すいき あくま けんぞく ちようもん しょにん

邪法を隨喜し、惡魔の眷属となる。

にほんこくちゅう しょにん ぶっぽう ぎょう

日本國中の諸人は仏法を行ずるに似て仏法を行ぜず、
に ぶっぽう ぎょう

たまたま仏法を知る智者は國の人に捨てられ、守護の善神
しゅご ぜんじん くに ひと す

は法味をなめざる故に威光を失い利生を止め、この国をす
ほうみ 賞 ゆえ いこう うしなりしよう とど くに 捨

て他方に去り給い、悪鬼は便りを得て國中に入り替わり、
大地を動かし、惡風を興し、一天を惱まし、五穀を損ず。故
に、飢渴出来し、人の五根には鬼神入つて精氣を奪う。こ
れを疫病と名づく。一切の諸人、善心無く、多分は惡道に
墮つること、ひとえに惡知識の教えを信ずる故なり。

仁王經に云わく「諸の惡比丘は、多く名利を求め、
國王・太子・王子の前において、自ら破仏法の因縁、破國
の因縁を説かん。その王別えずしてこの語を信聽し、横
しまに法制を作つて仏戒に依らず。これを破仏・破國の因縁

となす」文。文の心は、末法の諸の悪比丘、國王・大臣の
御前にして、國を安穩ならしむるようにして終に國を損じ、
仏法を弘むるようにして還つて仏法を失うべし、國王・
大臣、この由を深く知ろしめさずしてこの言を信受する故
に、國を破り仏教を失うといふ文なり。この時、日月度を
失い、時節もたがいて夏はさむく冬はあたたかに、秋は
悪風吹き、赤き日月出で、望朔にあらずして日月蝕し、あ
るいは二・三等の日出来せん。大火・大風・彗星等おこり、
飢饉・疫病等あらんと見えたり。國を損じ人を惡道におと

す者は、悪知識に過ぎたることなきか。

問うて云わく、始めに智者の御物語とて申しつるは、詮

おんものがたり もう

ずるところ、後世のことの疑わしき故に善惡を申して
うたが
うたが
おそ

承らんためなり。彼の義等は恐ろしきことにあるにこそ

はべ

いちもんふつう
われ

もの

侍るなれ。一文不通の我らがごとくなる者は、いかにして

ほけきよう

いん

そうちう

こころ
根

か法華経に信をとり候べき。また心ねをば、いかように

おも
さだ
はべ

思ひ定め侍らん。

こた
い

み

もう

いちじょう

思

答えて云わく、この身の申すことをも一定とおぼしめさ

ゆえ

もう

てんまはじゅん

あつきとう

るまじきにや。その故は、かように申すも天魔波旬・悪鬼等

みいひとよ ほうもん やぶ
の身に入つて人の善き法門を破りやすらんとおぼしめされ
候わん。一切は賢きが智者にて侍るにや。

とうら
と
問うて云わく、もしかようにはうに疑い候わば、我が身は愚者
にて侍り、万の智者の御語をば疑い、さて信ずる方も無
くして空しく一期過ごし侍るべきにや。

こた
と
答えて云わく、仏の遺言に「法に依つて人にいらざれ」と
と説かせ給いて候えば、経のどくに説かざるをば、いか

りょうぎきよう
ひと
りょうぎきよう
よ
ふりょうぎきよう
ひと
そうちゅう
と
にいみじき人なりとも御信用あるべからず候か。また
「了義経に依つて不了義経にいらざれ」と説かれて候え

ぐち　み

いちだいしょうぎょう

ぜんご

せんじん

わきま

ば、愚癡の身にして一代聖教の前後・浅深を弁えざらん

ほどは、了義経に付かせ給い候え。

了義経・不了義経も多く候。阿含の小乗経は

不了義経、華厳・方等・般若・淨土の觀経等は了義経。

また、四十余年の諸経を法華経に対すれば不了義経、

法華経は了義経。涅槃経を法華経に對すれば、法華経は

了義経、涅槃経は不了義経。大日経を法華経に對すれば、

大日経は不了義経、法華経は了義経なり。故に、四十余年

の諸経ならびに涅槃経を打ち捨てさせ給いて、法華経を

ししよう おんたの そうら ほけきょう こくおう ふぼ にちがつ たいかい
師匠と御憑み候え。法華経をば、国王・父母、日月・大海・
須弥山・天地のごとくおぼしめせ。諸経をば、関白・大臣・
くぎょうないしばんみん しゅしよう こうが しょせん そうちもくとう
公卿乃至万民、衆星・江河・諸山・草木等のごとくおぼし
めすべし。

われ み まつだいぞうあく ぐしゃ どんしゃ ほうき
我らが身は、末代造惡の愚者、鈍者、法器にあらざるの者。
こくおう しんか ひと ひと ふぼ たにん
国王は臣下よりも人をたすくる人、父母は他人よりも子を
もの にちがつ しゅしよう やみ て もの ほけきょう き
あわれむ者、日月は衆星より暗を照らす者、法華経は機に
かな よきよう たす がた 思

しゃかによらい あみだによらい やくしによらい たほうぶつ かんのん せいし
叶わづんば、いわんや余経は助け難しとおぼしめせ。また
釈迦如来と阿弥陀如来・薬師如来・多宝仏・觀音・勢至・

ふげん

もんじゅとう
いつさい

もうもろ
いつさい

ぶつぼさつ
われ

ほけきょう

じひ
じひ

ふぼ

普賢・文殊等の一切の諸の仏菩薩は我らが慈悲の父母、

ぶつぼさつ

しゅじょう

きょううけ

じひ
じひ

ほけきょう

もうもろ
ぶつぼさつ

この仏菩薩の衆生を教化する慈悲の極理はただ法華経に

留

思

のみとどまれりとおぼしめせ。諸経は悪人・愚者・鈍者・

によいん

こんかつとう
もの

すく

ひじゅつ

あらわ
あらわ

女人・根欠等の者を救う秘術をば、いまだ説き顕さずと

思

ほけきょう

いつさいきょう

すぐ
そうちろうゆえ

おぼしめせ。法華経の一切経に勝れ候故は、ただこのことに侍り。

とうせい
がくしゃ

ほけきょう

いつさいきょう

すぐ

しかるを、当世の学者、法華経をば一切経に勝れたりと
讃めて、しかも末代の機に叶わづと申すを皆信ずること、

ほ

まつだい
き

かな

もう

みなしな

あに謗法の人侍らずや。ただ一口におぼしめし切らせ給

ほうぼう

ひと

はべ

ひとくち

思

き

たま

そうちら

せん

ほけきょう もんじ やぶ

せけん あくごう たい

裂

いへえ。詮ずるところ、法華経の文字を破りさきなんどせんには、法華経の心やぶるべからず。また世間の悪業に対して云いうとむるとも、人々用いるべからず。ただ、相似たる権経の義理をもつて云いうとむるにこそ、人はたゞらかかるれとおぼしめすべし。

と
問うて云わく、ある智者の申され候いしは「四十余年の諸経と八箇年の法華経とは、成仏の方こそ、爾前は難行道、法華経は易行道にて候え。往生の方にては、同じきことにして、易行道に侍り。法華経を書き読んでも、

じっぽう じょうど あみだぶつ くに う かんぎょうとう しょきょう
十方の淨土、阿弥陀仏の國へも生まるべし。觀經等の諸經
に付いて弥陀の名号を唱えん人も、往生を遂ぐべし。た
だ機縁の有無に随つて、いざれをも諍うべからず。ただ
し、弥陀の名号は、人ごとに行じ易しと思つて日本國中
に行じつけたることなれば、法華經等の余行よりも易きに
こそ」と申されしはいかん。

こた い おお ほうまん はべ はべ せけん
ひと おお どうり おも ほけきょうとう よぎょう やす
ふしん ゆえ さき もう まつだい ぼんぶ

ちしゃ

特

よ

じょうだい

ちしゃ

およ

智者といふともたのみなし、世ぞりて上代の智者には及ぶべからざるが故に。愚者と申すともいやしむべからず、

経論の証文顯然ならんには。

そもそも、無量義經は法華經を説かんがための序分なり。

しかるに、始め寂滅道場より今の常在靈山の無量義經に至るまで、その年月日数を委しく計え举ぐれば四十余年

なり。その間の説くところの經を舉ぐるに、華嚴・阿含・方等・般若なり。談ずるところの法門は三乘・五乗の習う

ところの法門なり。修行の時節を定むるには「菩薩の

りやつこうしゅぎょう せんぜつ

歴劫修行を宣説す

い

ずいじい
ずいたい

わ

はこれを隨他意と宣べ、四十余年の諸經と八箇年の所説と

ことばおな

ぎか

さだ

の語同じく義替わることを定むるには「文辭は一つなり

おのおのこと

説

じょうぶつ

かた

べつ

もんじ

ひと

といえども、義は各異なり」ととけり。成仏の方は別に

おうじよう かた ひと

覚

けごん

ほうどう

して往生の方は一つなるべしともおぼえず。華嚴・方等・

はんにや

くきようさいじよう

だいじようきよう

とんご

ぜんご

ほうもん

みな

みけんしんじつ

みけんしんじつ

じょうぶつ

般若、究竟最上の大乗經、頓悟・漸悟の法門、皆「未顯真実」

と説かれたり。

だいぶ

しそきよう

みけんしんじつ

じょうぶつ

この大部の諸經すら未顯真実なり。いかにいわんや、淨土

さんぶきようとう

おうじようごくらく

みけんしんじつ

うち

漏

の三部經等の往生極楽ばかり未顯真実の内にもれんや。そ

の上、經々ばかりを出だすのみにあらず、既に年月日数を
出だすをや。しかれば、華嚴・方等・般若等の弥陀往生、
すでに未顯真実なること疑いなし。觀經の弥陀往生に限
つて、あに「留難多きが故なり」の内に入らざらんや。
もし、隨自意の法華經の往生極楽を隨他意の觀經の
往生極楽に同じて易行道と定めて、しかも易行の中に取つ
てもなお觀經の念佛往生は易行なりとこれを立てらるれ
ば、權實雜亂の失、大謗法たる上、一滴の水漸々に流れて
大海となり、一塵積もつて須弥山となるがごとく、漸く

ごんきょう ひと じつきょう

進

じつきょう ひと ごんきょう

ひと ごんきょう

墮

権經の人も実経にすすまず、実経の人も権經におち、
権經の人次第に國中に充滿せば、法華經隨喜の心も留
まり、國中に王なきがごとく、人の神を失えるがごと
く、法華・真言の諸の山寺荒れて諸天善神・龍神等一切
の聖人國を捨てて去れば、惡鬼便りを得て乱れ入り、惡風
ふいて五穀も成らしめず、疫病流行して人民をや亡ぼさ
んずらん。

この七・八年が前までは「諸行は永く往生すべからず。
善導和尚の『千中無一』と定めさせ給いたる上、選択には
ぜんどうおしよう せんちゅうむいち さだ たま うえ せんちやく

しょぎょう なげう ぎょう もの ぐんぞく み
『諸行を抛てよ。行ずる者は群賊』と見えたり」なんど
ほうご もう た し ごねん のち せんぢやくしゅう
放語を申し立てしが、またこの四・五年の後は「選択集の
ひと すす もの ほうぼう つみ しだんとも むけん
ごとく人を勧めん者は、謗法の罪によつて師檀共に無間
じごく お きょう み ほうもんしゅつたい
地獄に墮つべしと経に見えたり」と申す法門出来したり
はじ ねんぶつしゃ もう ほうもんしゅつたい
げにありしを、始めは念佛者ござりて不思議の思いをなす
うえ ねんぶつ もう もの むけんじごく お ふしぎ おも
上、「念佛を申す者、無間地獄に墮つべし」と申す悪人・外道
もう ことば ちえ付 ねんぶつしゃ むけんじごく お
あり」なんどののしり候いしが、「念佛者、無間地獄に墮つ
べし」と申す語に智慧つきて、各選択集を委しく披見
もう ことば ちえ付 おののおせんぢやくしゅう くわ ひけん
するほどに、げにも謗法の書とや見なしけん、千中無一の
ほうぼう しょ せんぢゅうむいち

あくぎ

とど

しょぎょうおうじょう

よし

ねんぶつしゃ

た

惡義を留めて諸行往生の由を念佛者ごとにこれを立つ。

くち

許

こころ

なか

もと

しかりといえども、ただ口にのみゆるして心の中はなお本
の千中無一の思いなり。

せんちゅうむいち
おも

ざいけ
ぐにん
ないしん

ほうぼう

知

在家の愚人は、内心の謗法なるをばしらずして諸行

おうじょう
くち
化

ねんぶつしゃ
ほけきょう

よし
しょうどうもん

ぼう

しょぎょう

往生の口にばかされて、「念佛者は法華経をば謗ぜざりけ

ほけきょう

ぼう

よし

ねんぶつしゃ
ほけきょう

ひと

もう

ひがごと

るを、法華経を謗する由を聖道門の人の申されしは僻事な
り」と思えるにや、一向「諸行は千中無一」と申す人より

ほうぼう

こころ

勝

そうちろう

とが

よし

ひと

も謗法の心はまさりて候なり。失なき由を人に知らせて、

ねんぶつ

ひろ

謀

しかも念佛ばかりをまた弘めんとたばかるなり。ひとえに

てんま はか
天魔の計りごとなり。

と い てんだいしゅう なか ひと た
問うて云わく、天台宗の中の人の立つることあり。「天台
だいし にぜん ほつけ あいたい にぜん きら にぎ いち
大師、爾前と法華と相対して爾前を嫌うに二義あり。一に
やくぶ しじゅうよねん ぶ ほけきよう ぶ あいたい にぜん そ
は約部。四十余年の部と法華經の部と相対して『爾前は麤な
ほつけ みょう た に やつきよう おし そ
り、法華は妙なり』とこれを立つ。二には約教。教えに麤な
みよう た けごん ほうどう はんにやとう えんどんそくしつ ほうまん
妙を立て、華嚴・方等・般若等の円頓速疾の法門をば妙と
たん けごん ほうどう はんにやとう さんじようりやくべつ しゆぎよう ほうまん
歎じ、華嚴・方等・般若等の三乗歴別の修行の法門をば
ぜんさんぎょう な そ きら えんどんそくしつ かた きら
前三教と名づけて麤なりと嫌えり。円頓速疾の方をば嫌わ
ほけきよう どう いちみ ほうもん
ず、法華經に同じて一味の法門とせり」と申すはいかん。

二
二

い

ふ
し
ん

は
べ

答えて云わく、このことは不審にもすること侍るらん。

てんだい みょうらく このかた いま ろんあ

しかるべしとおぼゆ。

てんだい さんだいぶろくじっかん そう

天台・妙樂より已来、今に論有ること

はべ

てんだい さんだいぶろくじっかん そう

に侍り。天台の三大部六十巻、総じて五大部の章疏の中

にも、約教の時は、爾前の円を嫌う文無し。ただ約部の時

やつきよう とき

にぜん えん

お

総

きら

にぜん

えん

きら

もんな

やくぶ

とき

ばかり、爾前の円を押しふさねて嫌えり。

にほん

にぎ

おんじょうじ

ちしようだいし

しゃく

お

日本に二義あり。園城寺には智証大師の釈

より起こつて

にぜん

えん

きら

い

さんもん

きら

い

たが

もん

爾前の円を嫌うと云い、山門には嫌わざと云う。互いに文

しゃく

りょうけん

いま

こと行

釈あり。ともに料簡あり。しかれども今に事ゆかず。

よ

りゅう

ぎ

ふしんは

覚

そうちう

ゆえ

ただし、予が流の義には不審晴れておぼえ候。その故

は、天台大師、四教を立て給うに四つの筋目あり。一には、
爾前の経に四教を立つ。二には、法華経と爾前と相対して
爾前の円を法華の円に同じて前三教を嫌うことあり。三に
は、爾前の円をば別教に摂して前三教と嫌い、法華の円を
ば純円と立つ。四には、爾前の円をば法華に同ずれども、
ただ法華経の一妙の中の相待妙に同じて絶待妙には同ぜ
ず。この四つの道理を相対して六十巻をかんがうれば、狐疑
の氷解けたり。一々の証文は、かつは秘し、かつは繁き故
に、これを載せず。

ほけきょう

ほんもん

にぜん
えん

しゃくもん
えん

にぜん
はつきよう

せつ

さき

みつ

そ

ひと

みよう

りやつこうしゅぎょう

なか

にぜん

はつきよう

ぜんさんぎょう

い

むりようぎきょう

じきどう

えん

にぜん

はつきよう

ぜんさんぎょう

うち

ちゅうしやく

にぜん

はつきよう

うち

い

じきどう

い

み

ほけきょう

しん

ひと

ほんぞん

ぎようぎ

い

と

また、法華經の本門にしては、爾前の円と迹門の円とを嫌うこと不審なきものなり。爾前の円をば別教に攝して、約教の時は「前の三つを麤となし、後の一つを妙となす」と云うなり。この時は、爾前の円は無量義經の歴劫修行の内に入りぬ。また、伝教大師の註釈の中に、爾前の八教を挙げて「四十余年未顯真実」の内に入れ、あるいは前三教をば迂回と立て、爾前の円をば直道と云い、無量義經をば大直道と云う。委細に見るべし。

問うて云わく、法華經を信ぜん人は、本尊ならびに行儀、

ならびに常の所行はいかにてか 候べき。

そらうるう

つね しょぎょう

ならびに常の所行はいかにてか 候べき。

そらうるう

答えて云わく、第一に本尊は法華経八卷・一卷・一品、

いっかん いっぽん

あるいは題目を書いて本尊と定むべしと法師品ならびに

いつかん いっぽん

じんりきほん

み

堪

ひと

しゃかによらい

たほうぶつ

神力品に見えたり。また、たえたらん人は釈迦如来・多宝仏

たてまつ たてまつ

を書いても造つても法華経の左右にこれを立て奉るべし。

じつぽう しよぶつ ふげんばさつとう

造 書

また、たえたらんは十方の諸仏・普賢菩薩等をもつくりかきたてまつるべし。

かなら ザリゅうぎょう

どうじょう

ぎょうぎ ほんぞん みまえ

かなら ザリゅうぎょう

だいもく

行儀は本尊の御前にして必ず坐立行なるべし。道場を

つね しょぎょう

だいもく

出でては行住坐臥をえらぶべからず。常の所行は題目を

選

選

い

なんみょうほうれんげきょう

とな

堪

ひと いちげいっく

南無妙法蓮華經と唱うべし。たえたらん人は一偈一句をも

よ たてまつ

読み奉るべし。助縁には南無釈迦牟尼仏・多宝仏・十方

諸仏・一切の諸の菩薩・一二乘・天人・龍神八部等、心に

したが じょえん なむしゃかむにぶつ たほうぶつ じっぽう

隨うべし。愚者多き世となれば、一念三千の觀を先とせず。

こころざし

ひと

かなら

しゅうがく

かん

さき

その志あらん人は、必ず習学してこれを觀ずべし。

だいもく

とな

くどく

問うて云わく、ただ題目ばかりを唱うる功德いかん。

しゃかによらい

ほけきょう

説

思

答えて云わく、釈迦如來、法華經をとかんとおぼしめし

しじゅうよねん

ほけきょう

て世に出でましまししかども、四十余年のほどは法華經の

おんとしさんじゅう

ころ

しちじゅうよ

いた

御名を秘しおぼしめして、御年三十の比より七十余に至る

みなひ

思

ほけきょう

ほうべん

設

しちじゅうに

はじ

だいもく

よ

まで法華経の方便をもうけ、七十二にして始めて題目を呼び出ださせ給えば、諸経の題目にこれを比ぶべからず。その上、法華経の肝心たる方便・寿量の一念三千・久遠実成の法門は妙法の二字におさまれり。

天台大師、玄義十巻を造り給う。第一の巻には略して妙法蓮華経の五字の意を宣べ給う。第一の巻より七の巻に至るまではまた広く妙の一字を宣べ、八の巻より九の巻に至るまでは法蓮華の三字を釈し、第十の巻には経の一宇を宣べ給えり。経の一字に華嚴・阿含・方等・般若・

ねはんぎょう

おさ

みようほう

にじ

げんぎ

ここる

涅槃經を収めたり。

妙法の二字は、玄義の心は

ひやくかいせんによ
百界千如・心仏衆生の法門なり。

止觀十卷の心は一念

さんぜん ひやつかいせんによ
三千・百界千如・三千世間・心仏衆生三無差別と立て給う。

しがんじっかん ここる いちねん

いつさい もろもろ
一切の諸の仏菩薩、十界の因果、十方の草木・瓦礫等、

みようほう にじ
妙法の二字にあらずといふことなし。

けごん あごんとう しじゅうよねん きょうぎょう
華嚴・阿含等の四十余年の経々、小乗経の題目には

だいじょうきょう くどく おさ
だいじょうきょう おうじょう だいもく

きょう だいもく じょうぶつ くどく
大乗経の功德を收めず。また大乗経にも往生を説く

きょう おう
経の題目には成仏の功德をおさめず。また王にてはあれ

おうちゅう おう
きょう ほとけ
ども王中の王にてなき経も有り。仏もまた経に随つて

きょう あ
きょう したが

たぶつ くどく
他仏の功德をおさめず。平等意趣をもつて他仏自仏とおな
じといい、あるいは法身平等をもつて自仏他仏同じという。
じつ いちぶつ いつさいぶつ くどく
実には一仏に一切仏の功德をおさめず。

ほつしんびょうどう
じぶつたぶつおな
いま ほけきょう しじゅうよねん しょきょう いつきょう おさ
今、法華経は四十余年の諸経を一経に收めて、十方世界
さんじんえんまん しょぶつ
の三身円満の諸仏をあつめて釈迦一仏の分身の諸仏と談ず
ゆえ いちぶついっさいぶつ
る故に、一仏一切仏にして、妙法の一宇に諸仏皆收まれり。
ゆえ みようほうれんげきょう ごじ とな
故に、妙法蓮華経の五字を唱うる功德莫大なり。「諸仏・
諸経の題目は法華経の所開なり。妙法は能開なり」としり
て、法華経の題目を唱うべし。

問うて云わく、この法門を承つてまた智者に尋ね申し
候えば「法華經のいみじきことは左右に及ばず候。ただ
し、器量ならん人は、ただ我が身ばかりはしかるべし。末代
の凡夫に向かつて、ただちに、機をも知らず、爾前の教を
云いうとめ法華經を行ぜよと申すは、としごろの念佛なん
どをば打ち捨て、また法華經にはいまだ功も入れず、有に
も無にもつかぬようにてあらんずらん。また、機も知らず
法華經を説かせ給わば、信する者は左右に及ばず、もし謗ず
る者あらば定めて地獄に墮ち候わんずらん。その上、仏も

しじゅうよねん　あいだほけきょう　と　たま
四十余年の間 法華経を説き給わざることは『もしただ
ふつじょう　ほ
仏乗を讃むるのみならば、衆生は苦に没す』の故なりと。
ざいせ　き
在世の機すら、なおしかなり。いかにいわんや末代の凡夫を
しゅじょう　く　もつ
ひゆほん
ほとけしゃりほつ　つ
のたま
まつだい　ぼんぶ
ゆえ
ひと　なか
ひゆほん
ほとけしゃりほつ　つ
のたま
まつだい　ぼんぶ
ゆえ
や。されば、譬喻品には、仏舍利弗に告げて言わく『無智
きょう　と
の人の中にして、この経を説くことなけれ』と云々。こ
そそうろう
れらの道理を申すは、いかんが候べき。
こた　い
ちしゃ　おんものがたり　おお　うけたまわ　そうち
まつだい　ぼんぶ
鑑　き
と
そうち
そうち
か　ひと
ひと　ぼう
ずるところ「末代の凡夫には機をかがみて説け。左右なく説
いて人に謗ぜざすることなけれ」とこそ候なれ。彼の人さ

もう

そら

ごへんじそらう

様

よう に申され 候 わば、御返事 候 べきよ うは「そもそも」も
しただ仏乗を讚むるのみならば』乃至『無智の人の中にして
て』等の文を出だし給わば、また一経の内に『およそ見る
ところ有る。我は深く汝等を敬う』等と説いて、不輕菩薩
の杖木・瓦石をもつてうちはられさせ給いしをば顧みさせ
給わざりしはいかん』と申させ給え。

問うて云わく、一経の内に相違の候なることこそ、よ
に心得がたく侍れば、くわしく承り候わん。

答えて云わく、方便品等には機をかがみてこの経を説く
こた
い
ほうべんぽんとう
き
と

べしと見え、不軽品には謗ずともただ強いてこれを説くべ
しと見え侍り。一経の前後、水火のごとし。
しかるを、天台大師会して云わく「本すでに善有れば、
釈迦は小をもつてこれを將護し、本いまだ善有らざれば、
不軽は大をもつてこれを強毒す」文。文の心は、本善根あ
りて今生の内に得解すべき者のためには、直ちに法華經を
説くべし。しかるに、その中になお聞いて謗ずべき機あら
ば、しばらく権經をもつてこしらえて、後に法華經を説く
べし。本大の善根もなく、今も法華經を信ずべからず、な

あくどう　お　　ゆえ

ゆえ

お

ほけきょう

にとなくとも悪道に墮ちぬべき故に、ただ押して法華経を
説いてこれを謗ぜしめて逆縁ともなせと会する文なり。

この釈のごときは、末代には善無き者は多く善有る者は
少なし。故に悪道に墮ちんこと疑いなし。同じくは法華経
を強いて説き聞かせて毒鼓の縁と成すべきか。しかれば、
法華経を説いて謗縁を結ぶべき時節なること諍い無きも
のをや。

また、法華経の方便品に五千の上慢あり。略開三顯一を
聞いて広開三顯一の時、仏の御力をもつて座をたたしめ
き
こうかいさんけんいち　とき
ほとけ　おんちから
ざ　立

給う。後に涅槃經ならびに四依の辺にして今生に悟りを得
せしめ給うと、諸法無行經に、喜根菩薩、勝意比丘に向か
つて大乘の法門を強いて説ききかせて謗ぜさせしと、この
二つの相違をば天台大師会して云わく「如來は悲をもつて
の故に發遣し、喜根は慈をもつての故に強説す」文。
文の心は、仏は悲の故に、後のたのしみをば閣いて、
當時法華經を謗じて地獄におちて苦にあうべきを悲しみ給
いて座をたたしめ給いき。譬えば、母の子に病あると知れ
ども、当時の苦を悲しんで左右なく炎を加えざるがごとし。

喜根菩薩は、慈の故に、当時の苦をばかえりみず後の樂を思つて強いてこれを説き聞かしむ。譬えば、父は、慈の故に、子に病あるを見て当時の苦をかえりみず後を思う故に灸を加うるがごとし。

また、仏の在世には、仏法華經を秘し給いしかば、四十余年の間、等覚・不退の菩薩、名をしらず。その上、寿量品は法華經八箇年の内にも名を秘し給いて最後にきかしめ給いき。末代の凡夫には左右なくいかんがきかしむべきとおぼゆるところを、妙楽大師釈して云わく「仏世は

とうき ゆえ かん
当機の故に簡ぶ。末代は結縁の故に聞かしむ」と釈し給え
り。

もん こころ ほとけ ざいせ ほとけ いちご あいだおお ひとふたい
文の心は、仏の在世には、仏、一期の間多くの人不退
くらゐ くらゐ ほとけ いぢご あいだおお ひとふたい
の位にのぼりぬべき故に、法華經の名義を出だして謗ぜし
き 挑 と ほとけ みようぎ い
めず、機をこしらえてこれを説く。仏の滅後には、当機の
しゅ すく けちえん しゅおお ほとけ めつご ほとけ めつご とうき
衆は少なく結縁の衆多きが故に、多分に就いて左右なく
ほけきよう と もん たぶん つ そ う ぼう とうき
法華經を説くべしといふ文なり。

てい おお しな まつだい し おお き し
これ体の多くの品あり。また末代の師は多くは機を知ら
じつきよう と し
ず。機を知らざらんには、強いて、ただ実教を説くべきか。

されば、天台大師、釈して云わく「等しくこれ見ざれば、
ただ大のみを説くに咎無し」文。文の心は、機をも知らざ
れば大を説くに失なしという文なり。また時の機を見て
説法する方もあり。皆國中の諸人、權經を信じて實經を
謗じあながちに用いざれば、彈呵の心をもつて説くべきか。
時によつて用否あるべし。

問うて云わく、唐土の人師の中に一分、一向に權大乗に
留まつて實經に入らざる者は、いかなる故か候。

答えて云わく、仏世に出でましまして、先に四十余年の

ごんだいじょう しようじょう きょう のち ほけきょう と のたま
権大乗・小乗の経を説き、後には法華経を説いて言わ
く「もし小乗をもつて乃至一人をも化せば、我は則ち
けんどう だ じ ふか もん け われ すなわ
慳貪に墮せん。この事は不可となす」文。

ほけきょう

と

み

のち

ねはんぎょう

かさ

法華經を説くべしと見えたり。後に涅槃經に重ねてこのことを説いて、仏の滅後に四依の菩薩ありて法を説くにまた法の四依あり、実經をついに弘めずんば天魔とするべきよしを説かれたり。

故に、如來の滅後、後の五百年・九百年の間に出て給いし龍樹菩薩・天親菩薩等、あまねく如來の聖教を弘めたも給うに、天親菩薩は、先に小乘の説一切有部の人、俱舍論を造つて阿含十二年の經の心を宣べて、一向に大乗の義理を明かさず。次に十地論・攝大乘論釈論等を造つて

しじゅうよねん ごんだいじょう ここる の のち ぶつしょうろん ほつけろんとう
四十余年の権大乗の心を宣べ、後に仏性論・法華論等を
つく じつだいじょう ぎ の りゅうじゅぼさつ
造りてほぼ実大乗の義を宣べたり。龍樹菩薩またしかな
り。

てんだいだいし とうど にんし
天台大師、唐土の人師として、一代を分かつに大小・権実
けんねん よ にんし
顯然なり。余の人師は、わずかに義理を説けども分明なら
しょうもん
ず。また証文たしかならず。ただし、末の論師ならびに訳者、
とうど にんし なか だいしょう
唐土の人師の中に、大小をば分かつて大において権実を分
ことば わ
かたず、あるいは語には分かつといえども心は権大乗の
ふたい もろもろ ぼさつ
おもむきを出でず。これらは「不退の諸の菩薩は、その数
かず

趣

い

ふ

も

る

か

こうじや

し

あた

そらう

恒沙のごとくして、また知ること能わじ」とおぼえて 候なり。

疑つて云わく、唐土の人師の中に、慈恩大师は
十一面觀音の化身、牙より光を放つ。善導和尚は弥陀の
化身、口より仏をいだす。この外の人師、通を現じ徳をほど
こし三昧を發得する人、世に多し。なんぞ權実一経を弁え
て法華經を詮とせざるや。

答えて云わく、阿竭多仙人外道は、十二年の間、耳の中
に恒河の水をとどむ。婆藪仙人は自在天となりて三目を現

とうど どうし なか

ちようかい きり 出

らんぱ くも

ず。唐土の道士の中にも、張階は霧をいだし、欒巴は雲を

吐

はく。

第六天の魔王は仏の滅後に比丘・比丘尼・優婆塞・

うばい あらかん ひやくしぶつ

かたち げん

しじゅうよねん

きょう

うばそく

優婆夷・阿羅漢・辟支仏の形を現じて四十余年の経を説く

み

つうりき

ちしゃ

ぐしゃ

知

べしと見えた。通力をもつて智者・愚者をばしるべから

じつきよう

ほとけ ゆいごん

ほとけ

じつきよう

にんし ごんきょう

じつきよう

いつこう

ごんきょう

ひろ

じつきよう

じゅくじゅう

ひろ

ざるか。ただ仏の遺言のごとく、一向に権経を弘めて

じつきよう

ひろ

ひろ

じつきよう

にんし ごんきょう

じつきよう

いつこう

ごんきょう

ひろ

じつきよう

じゅくじゅう

ひろ

実経をついに弘めざる人師は、権経に宿習ありて実経

い もの

ま

ま

ま

ま

ま

ま

ま

ま

ま

ま

ま

に入らざらん者は、あるいは魔にたばらかされて通を現す

るか。

ほうもん

じやせい

糾

りこん

つうりき

依

ただ法門をもつて邪正をただすべし。利根と通力とにはよ

るべからず。

ぶんおうがんねんたいさいかのえさるごがつにじゅうはちにち

文応元年太歳庚申五月一十八日

かまくらなごえ

か
お

鎌倉名越において書き畢わんぬ。

にちれん
日蓮

かおう
花押